
封印

よしき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

封印

【Nコード】

N9730B

【作者名】

よしき

【あらすじ】

暗闇に潜む悪魔。叶わぬ願い。切ない恋心。彼女との間にある封印。ダークファンタジー。

1幕

風が渡ってゆく。草原をなびかせて。

風のリズム。

草のメロデー！。

青空からこぼれる光。

古びた遺跡の柱が影を伸ばしてゆく。

草の間からひよっこりと顔を表す彼女。

辺りを見回し、何かを探している。

この辺りの多くの村の娘と同じ様に、頭からすっぽりと被る大きなワンピースに各々が好きな色に染めた帯を締めている。

彼女のそれは全てが緑色に染められ、手足や顔だけがポツカリと浮かんでいるように見える。

真剣に辺りを窺う。

子狐が親の真似をして獲物を狙うかのような仕草に、思わず笑みがこぼれる。

突然、柔らかな黒髪が跳ねる。

草間を縫うように二つに結んだ髪が揺れる。

右に。

左に。

相手を追い詰めるように逃げ道を選ばせない。

シャン、シャン、シャン、シャン。

帯に付けてあげた鈴の音が揺れる。

風を切る黒髪が揺れる。

シャン、シャン…。

ザザァッ！

小さな何者かが僕の足元へ飛び込んでくる。

木製の髪飾りを口にくわえた野良猫だ。

悪戯のつもりだったが、突然人に襲われて恐ろしくて口を放す事無く逃げてしまったのだろう。

猫は僕の姿に驚き立ち止まってしまう。

「待ちなさい！」

彼女の声が、指が猫を捕まえようと伸びてくる。

猫はまだ躊躇している。

僕の目の前で彼女の指が光る。

「やめろ！ユリ！」

声に驚いた猫の体が飛び跳ねた。

バンッ！！

今まで猫のいた辺りで砂煙が上がる。

猫は…いない。

辺りに細かい木っ端が散乱している。

それは多分髪飾りだった物。

そして猫は…。

猫は死んだ…。

彼女の力で…。

「ユリ！」

彼女の手を掴み大きな声を上げると、反射的に震える体を縮こまらせた。

「何て事をしたんだ！これじゃ猫が…あの猫は…。」

彼女のしでかした事に怖くなり、声が震える。

僕は恐ろしさに目を閉じる。

そんな事をして世界はなくならない。

事实は消えたりしない。

解っているけれど、どうしても恐ろしかったのだ。

あの力を使って、一瞬にして猫を殺してしまった…。

そんな力をユリが持っていることが。

無邪気にそんな事が出来る今のユリが。
怖かった。

「どうして壊しちゃいけないの？」

少し拗ねた顔で。

でも赤子のように純粋な瞳が僕に聞き返す。

僕はゆっくりと首を振る。

「壊した、じゃない。猫は死んでしまったんだよ。」

「死んでしまった…？」

「そう。猫や人間は死んでしまうんだ。」

「アキも？」

「うん、僕もだよ。」

「ヤダ！」

彼女は僕の服を掴み、声を張り上げる。

「アキは死んじゃダメ！ね。お願い。」

「ありがとう。僕もユリが死んだらヤダよ。」

なだめるように髪を撫でてあげる。

「本当はね、あの猫さんも同じように大事にして欲しかったな…。」

「…ユリ、悪い子？悪い事しちゃったの？」

「うん。…そうだね。」

「どうしよう…。ユリ悪い子なの。だって悪い事って知らなかったから、だからユリ…。」

「じゃあ、猫さんに、ごめんなさいしよう。ね。」

ユリは頷き何度も何度も謝った。

「猫さん、ごめんね。ごめんね…。」

僕はその背中をそっと抱いてあげる。

本当は20歳の女性。

でも記憶をなくし彼女の頃にまで退行してしまった精神を抱えてい

る。

本当は謝らなければいけないのは僕のほうなのに。
今はただ抱きしめる事しか出来ない。

いつ来てもここは嫌な場所だ。

どんなに気をつけていても、憂鬱な死にたい気分になる。
暗闇がジワジワと首を締め付ける。

祭壇の様子が眼球を潰そうと迫り来る。

とぐろを巻き絡み合う双頭の蛇。

黒く浮き上がるしみ。

心臓は早鐘を打つ。

不安な、嫌な予感。

結界が緩んでいるのだろうか。

今にも祭壇の蓋を開け、あの恐ろしい悪魔ルードが世界へ染み出そうとしているのか。

肉を喰らい、血を啜り。

全てを破壊し尽くそうと…。

ダメだ。

このままでは恐ろしい考えに心囚われてしまう。

身構えるように腰の剣に手を伸ばす。

神魔封じの剣。

封印の鍵となる悪魔殺しの剣。

これを受け取った私こそが、ただ一人の封印師なのだと、一人言い聞かせた。

「これからは…お前が…封印をまもって…。」

差し出された手から力が抜けてゆくのを引き戻すように力強く握り締める。

指の隙間を、命が滑り落ちてゆく。

「先生！先生！！」

ゆっくりと落ちたビー球が碎けるように。

崇高な魂が。

碎け散ってしまった。

私はもはや一人なのだと思ひ知るには暫らくの時間を必要とした。まだ何も教わっていない。

何も恩返しする事もなく、大事な人はいなくなってしまう。

私は唇を噛みしめる。

泣いている暇など無い。

先生の後を継ぎ、遺跡の封印を守っていかねばならないのだ。古より伝わる剣を握り締め立ち上がる。

「先生…これより私が…封印師です。必ず…かならず…。」
涙は止める事は出来なかった。

いいのだ。

今はこれで。

あの時私はそう願ひ、誓ったのだから。

回想に囚われていた頭を振り払う。

結界強化の儀を執り行わなければいけない。

世界を…。

この世界を守らねばならない。

この世界に住む、人々…。

いや。

本当はただ一人。

彼女を守りたいだけなのかもしれない。

人間が生きてゆく原理など所詮そんなものだろう…。

この想いはそこまで届かないだろう。

世間はそれを許さないだろう。

でも私はそれ以外に生きてゆく術を知らない。

再び廻り合えた運命を恨みもしない。

想いは消えない。

封印師になった事への後悔も無い。

あんな事件があつた事を喜ぶ自分がいる。

暗い、暗い、残酷な想い。

それでも私は彼女を！！

…こんなにも欲しいと願う！

酷く、醜い、私の心。

神魔ユーステフを目の前にかざす。

本当に封印しなければならぬのは、こんな私の心なのかもしれない…。

刀身が鈍く光を帯びた。

そしてそれは一瞬の出来事だった。

神魔ユーステフを奪い祭壇へと走り去る影。

私が止める間もなく、祭壇へと突き立てられる刀身。

光が消え、闇の密度が濃くなる。

「…ごめんなさい…でも、こうするしか…」

苦しい女の声。

私は動けない。

その声を耳にしては動けなくなってしまう。

何故？

何が彼女を？

そんな事よりも、私の心を凍りつかせる声。

「貴方に会わなければ良かった…。こんな世界なんて!!」

影が、女が振り向く。

「貴方の所為で…こんな気持ちになるなら、世界など始めから無ければいいのよ!!」

それは私が心にただ一人思い続けた女性、ユリだった。

「何故君が封印を…。」

僕の手は、声はもう彼女には届かない。

鈍い音を立てて割れる祭壇の奥底から、果てしない暗闇から矢の如く光が飛び出す。

一つ。

二つ。

数を増し暴れ回る光は次々と彼女に突き刺さる。

呻き声を上げる間もなく彼女の体は光の矢に引き裂かれ、その小さな体は舞うように弾けた。

…。

声も出ない。

何も出来ない。

ただ、私は…。

ドサッ。

鈍い音に目を向ける。

そこに彼女の体はあった。

自分でも思わぬ力でユリに駆け寄る。

力なく横たわる肢体。

突然、ギョロつと目が見開かれる。

私は息を飲んだ。

もはやそれは人間の物ではなかった。

2幕

「アキ。」

背後から控えめな優しい声。

振り返るとユリが立っている。

小柄な彼女には大きすぎるほどの籠を抱えている。

「わざわざ持つて来てくれたのかい？私が取りに行く何度も言っているのに…」

ユリは静かに顔を横に振る。

それもそうだ。

封印師など村の人々に忌み嫌われている存在なのだから。

それに誰もこの封印の地には近寄ろうともしない。

それ程悪魔ルードの名は人々の心を震え上がらせる。

潜在的に、村の誠めとなるほどに、悪魔の腐臭は封印から染み出し人の心を汚染していた。

穢れを恐れ、呪いを恐れ、誰も触れようとはしない。

ただ一人、ユリを除いては。

「ありがとう。もう村に帰った方が良いよ。」

ユリは頷くが一向に帰ろうとはしない。
多分。

彼女にとってもあの村には居場所が無いのだろう。

出戻りの女に世間は冷たい。

例えばそれが彼女の所為ではなくても、だ。

「…そうだ、ユリ。ちょっと待っていてくれるかい？」

ユリの返事も待たず、一人で暮らす粗末な小屋へと走り出す。

これ以上は耐えられない。

ユリの顔を見ていると心がおかしくなってしまうそうだ。

私は、ユリの事を…。

暫らく考えないようにしていた想いが心の中を駆け巡る。
たまらなくなり私はその場を逃げ出した。

私が封印師としての修行の最中。

ユリの婚礼の話が進められていた。

隣の村の豪商の息子との結婚。

容姿、性格ともに問題は無く、誰もが幸せな結婚だと思った。
でも実際のところ回りの人間にユリは強要されていたらしい。
理由も言わず、ただひたすらに断り続けるユリ。

しかし回りはそれを認めない。

そして理由が無いのならば、と半ば無理やり押し進められてしまっ
たのだと聞いた。

隣の村での華やかな結婚式。

盛大な互いの村の祝福。

彼女の本心とは裏腹に幸せな結婚になるはずだった。

でも、悲劇はその夜に起こった。

聖なるアウラの神秘の香に刺激された魔獣が村を荒らした。

手当たり次第に27人を食い漁ったのだ。

その中には彼女の伴侶となった男の姿もあった。

幸福なはずの夜は、魔獣により引き裂かれてしまったのだ。

そしてユリは元の村に戻る事になる。

人々は囁きあう。

「結婚を快く思わなかったユリの仕業じゃないのだろうか…」と。

私ができる事を知るのには、事件後1ヶ月も過ぎての事だった。

子供の頃から密かに想いを寄せていたユリ。

彼女がそんな目に会っていた時、私は何をしていた？

俗世を捨て、修行に明け暮れ、先生の死に悲しんでいただけだ。

私が封印師を目指したのは、世界を、ユリを守りたいと思ったからではなかったのか…。大事な物を守れない不甲斐なさ。

私は無力感に打ちのめされた。

封印師としての使命を投げてもユリの傍に行きたかった。

でも、それは叶わぬ出来事。

神の前で夫婦になる事を誓ったユリは、断じて私などに身も心も許すはずが無い事を理解していたから。

なのに…。

それなのに彼女は私の前に現れた。

封印師となった私の身を案じての事だと思った。

逃げ場が何処にも無かった事もあるのだろう。

幾度となくユリは此処を訪れた。

食べる物や身の回りの必需品を手し、多くを語るわけでもなく、ただ静かに微笑みながら私の顔を見つめる。

ただそれだけの事だった。

私はそのつど淡い希望を断ち切り、彼女に当り障りの無い返事をするので一杯だった。

だから、それも何気ない事だと思っていた。

修行の合間の時間で、私は思いついた副業に手を染めていた。

木片を削って作った髪飾りや腕輪など。

少しでも生計を立てられればと思い、作り始めたところだった。

初めての完成品をユリに手渡した。

木にもたれかかる少女を模したこぶし大の髪留め。

自分では上手く出来てと思うし、何より彼女の心がそんなもので少しでも安らげば、との想いもあった。

ユリは髪留めを両の手で握り締める。

小さな声で「ありがとう」と呟き、村へと続く坂を下り帰ってゆく。そんな何気ない事だった。

しかし後に彼女の秘めた想いを知ることとなる。

狂気はすでに始まっていた…。

終幕

見開かれた目は人間の物ではない。

私は無我夢中に剣を突き立てた。

分かっていた。

それが幼馴染の女性の体であるという事は。

理解していた。

それが私がただ一人愛したユリだという事は。

<これは悪魔ルードだ！>

そう言い聞かせる。

<これは悪魔だ！>

<悪魔ルードだ！>

しかし神魔ユーステフはやわらかなユリの胸に刺さっている。

私は、封印師なのだ…。

頬に熱い物を感じる。

手で拭うと真つ赤な血が付く。

これは…ユリの血…。

「あ…あああ…」

私は悪魔を殺した…。

恐怖が私の手を動かした。

でも、これは…これではユリは…。

<私はユリを殺した>

「うあああああ！」

絶叫が迸った。

声で世界が壊れてしまえば良いと思った。

涙が溢れ出る。

このまま何も見えなくなれば良いと思った。

私はユリの体を抱きしめる。

このまま。

このまま…。

「ユリイイ！」

「…ア…アキ…。」

静かな声が私の耳に聞こえる。

ユリの小さな、小さな声。

目を覗き込む。

そこには琥珀色の昔から知っている幼馴染の瞳。

「…ユ…リ？」

キュン！

突然音を立てて神魔ユーステフが光る。

ユリの胸の辺りから光り始めたそれは、柄まで辿り着くとスウと溶ける様に消えてゆく。光の粉がユリの体に降りかかり、いつしか剣は消えてしまう。

なに…が…。

いったい何が起きているんだ？

ユリの胸には剣も、そして傷や血の跡すら残ってはいない。

「ユリ！」

私はもう一度だけ、恐る恐るその名を呼ぶ。

長いまつげが震えながら動いた。

「何で…来てくれなかったの？」

その言葉に胸倉を掴まれたような気がした。

「ずっと、ずっと好きだったの…アキの事。

でも…みんなが…だから仕方なかったの…。

仕方なかったの…それなのに。」

ユリの頬を涙が伝う。

「それなのに…あなたが優しいから…私…。」

白い指が私を探す。

そして目に見えない障壁に邪魔されたように崩れ落ちてゆく。

「…。」

「ユリ？」

「…ごめん…ね…。」

力を無くしユリの首がカクンと落ちる。

「ユリ…？ユリ！」

私は細い体を抱きかかえた。

この陰鬱な場所を離れるために。

ユリはそれから2日ほどして目を覚ました。

しかしユリには何もなくなっていた。

子供の様な白紙の心。

私の事も覚えていない。

今まであったことすら…。

私は彼女を連れ、誰もいない土地へと住居を移した。

二人にとって忌まわしい記憶しか残らない場所を離れたかったから。適当な土地を見つけると2人で隠れるように暮らした。

子供の様なユリの世話をすることは私にとっては喜ばしく、むしろ幸福な事だった。

そんな生活をする中で気がついたことがある。

ユリは人のものではない不可思議な力を時々使うのだ。

推測に過ぎないが、それは恐らく悪魔ルードの力…。

あの恐ろしい悪魔はユリの中に潜み、外へ出る機会を待ち続けている。

そしてもう一つ。

ユリの中には、私の愛した、そして私を愛さないユリの精神がある。ただそう信じたいただけなのかもしれない。私の想いが変わらぬのと同じように。

そして今のユリはそれらにまるで蓋をするように、無垢な少女の姿を現している。

これは私が望んだ結果なのかもしれない。いつか彼女の封印は破られる。

それが「ユリの記憶」か「悪魔の力」かの違いだけだ。

そうなれば私達にとって世界など意味をなさない物になる。

記憶はユリを壊し、私をも壊すだろう。

力は世界を壊し、人を滅ぼすだろう。

だから、全てを白紙にしてしまえば良い。

結婚した事も。

陰湿な嫌がらせも。

私が、そして彼女がお互いの気持ちを裏切った事。

苦しみや、あの土地の力が私達の心を狂わせた事。

全て。

全て消え去ってしまえば良い。

そんな私の邪まな願いをあの土地に蔓延る悪意が叶えたのだとしか思えない。

その狭間で壊れてしまったユリの心。

これは、私の望んだ結末。

それが目の前の少女。

陽が大きく傾き、草原を金色に染めてゆく。

風になびく金色の音譜は夕闇の到来を告げる。

「さあユリ、そろそろ冷えてきたよ。お家に入ろうか。」

私はユリの手を取り、暖めてやるように抱きしめる。

温もりを求めるようにしがみつく身体。

でも私には決して忘れる事の出来ない記憶。

その所為で…。

私の所為で…。

脆弱な封印は破られる事になるだろう。

そして世界はじきに終わりを告げる。

だから。

だから今だけは、この幸せを。

一緒にいられる幸福を。

ほんの一瞬だけの幸せでも。

そんな、私達の間にある「封印」が今は平穏を保っている。

< 終 >

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9730b/>

封印

2010年10月28日06時21分発行